

Hot head and cold hearts never solved anything

「怒りやすい頭と冷淡なところ」と訳されていますが、原文ではHot head and cold heartsで、まさに好対照の「熱い頭」と「冷たい心」です。

「熱い頭」つまり、怒りやすい頭、または怒った頭では、問題解決への正しい判断が狂いだし、周りの意見も忠告も受け付けなくなり、ひどく争い好きになったり、逆に自分を責めて心を閉ざしたり、更には余計なことを口にして、売り言葉に買い言葉、頭はますますヒートアップ！悪循環です。これでは問題の解決どころか、新たな問題を生み出しかねません。

「冷淡なところ」はどうでしょう。無関心・無気力・無感動の「三無主義」と言われる時代です。何かをしよう、やり遂げようという意欲がないのです。取り組む気がなければ、なにも解決しようがありません。

W杯も佳境に入ってきましたが、サッカーではよく「心は熱く、頭はcoolに！」と言われます。イライラしていたら、良いプレー、良い判断ができません。技術は一流でありながら、頭が熱くなってつまらない失敗をする人が時々います。時には自分や他の人の人生の輝く可能性を棒に振ってしまうことさえあり得ます。熱い頭は怖いですね。

しかし体や足が疲れて来た時、それでも奮い立ってチャレンジできるのは、ハートが熱く燃えている時です。心を熱く燃やす、もっとも強いエネルギーは愛です。W杯ならばサッカー愛、チーム愛、または愛国心で、また家族やファンの応援を力に変えて闘う人もいるでしょう。熱い心は不可能と思える壁にまでぶち当たる力を持っています。

グラハム氏の今日の一言は、裏を返せば「クールな頭と熱い心をもって、解決に向かって歩み出せ。」という激励にも聞こえます。聖書には「心を熱くし、主に仕えよ」とあります。愛の中の愛である神の愛を心に受け入れた時、人の心は最高に熱く燃え上がります。その熱い愛の心は、クールな頭を助けます。神を愛し、自分を愛し、人を愛せるので、頭が感情的に暴走しなくて良いのです。具体的な解決の扉がまだ開かない時ですら、「愛されている」と分かっただけで癒される時があります。解決に向かって一歩踏み出す勇気が与えられます。神の愛は、平和のうちに人に力と勇気と忍耐を与えるものだからです。

There is nothing wrong with men possessing riches. The wrong comes when riches possess men.

富を「得る」とか、「支配する」という言葉でpossessという言葉が使われています。W杯も間もなく決勝という所まで来ました。またサッカーの話にお付き合い下さい。試合中にball possessionとって、ボール支配率が表示される時があります。Aチーム55%Bチーム45%、という具合です。それまでの時間で、どちらがどれだけ多くボールをコントロールしていたかが分かります。それで勝敗の全てが決まる訳ではありませんが、多く支配していればそれだけ有利に試合を進めていると予想されます。丸いボールはほぼ忠実に、狙った方向へ転がり、または飛んでゆきます。しかしもし仮に、ボールが急に自分の意思を持ち、思いのままに跳ねたり転がったり、好きな方向に飛んで行き始めたりしたらどうでしょう。試合は混乱し、何よりボールを追いかける選手たちは疲れ果ててしまうでしょう。

人が富を正しくコントロールしている間は良いのですが、今日の一言ではまるで勝手に動き始めたボールのように「富」が独り歩きを始め、それを人が眼の色を変えて追いかけている、という絵を描き出し

ています。しかも、ボールが人を支配するなんてことは見たことがありませんが、富に支配されている人の現実を私たちは実際に見ているのです。金のために悪事や不正に手を染めたり、人の命を奪ったり、時には友人や家族の命を殺めるような、痛ましいニュースが後を絶ちません。金よりも命や家庭や人として正しく生きることのほうが大切だと、頭では分かっているはずなのに、それでも金のためにそれらを犠牲にしてしまう姿を見る時に、富が人を支配することが現実身近にあるのだ、と認めざるを得ないのではないのでしょうか。

他人事ではなく私たちも気をつけないと、金や富が目の前にチラつくと、心が揺らいでしまいます。グラハム氏のいのちの書である聖書には「だれも、二人の主人に仕えることはできません。」という言葉に続いて、「あなたがたは神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」と書かれています。これは人が金や富を、まるで神でもあるかのようにしてしまい得るのだという危険を示唆しています。富を得ることが人生の目的になってしまうと、この危険な罠に陥ってしまいます。自分の人生の目的は何か、自分に人生を与えてくれた神さまとの関係の中でしっかりと持つ時、初めてきちんと富と自分を正しくコントロールして生きることができるのだ、と語りかけているのではないのでしょうか。

Courage is contagious. When a brave man takes a stand, the spines of others are stiffened.

良くも悪くも、「赤信号みんなで渡れば怖くない」というフレーズにドキッとして、失笑している私たち日本人にとっては、分かっているんだけどなかなか...、と尻込みしてしまいそうな今日の一言ですね。それでいて、憧れのようなものを感じる一言でもあります。

翻訳では、「物事ははっきり言えば人に伝わって行く」と、分かりやすく表現されていますが、原文からは勇気ある人が自分の立場をはっきりと示すということで、それが言葉だけでなく、態度や行動であっても良い訳です。周囲の人々に合わせるのが得意な文化の中で育った人には、最初に勇気ある行動を取るのが苦手で、そもそも目立つことがいけないことのような空気を感じます。その代りと言っては何ですが、誰かが動いたら、真似して動くことはお手の物です。

この作用が悪く働くことがあります。悪いことでも誰かがやってしまうと、周囲では「あいつがやったんだから俺も」と乗ってしまう、悪いと知りつつ、今までは我慢できた事なのに、人を見て手を出してしまう、そんな良くない連鎖が起きてしまいます。イジメなどもその類かもしれませんね。恥ずかしい話、私が横浜でやんちゃな中学生だった頃、本物の料理がサンプルに並ぶレストランの前で悪仲間とダベッていて、ふざけてそのサンプルの一切れを食べたのです。すると仲間たちは「最初に食った奴が一番悪い」とか言いながら、結局皆で平らげちゃったのです。その日のランチはライスとサラダとコーヒーだけで1200円という、ひどいサンプルになってしまいました。自分が一番の責任を負わないで済むと思ったのか、とにかく、悪いことをしました。

そんな自分がキリストにあって改心しました。その店には8年後に思い出して、お詫びに行って弁償しました。同じ勇気を持って周囲に影響を与えるなら、もう悪いことではなくて、良い初めの一步を踏み出したいと思えるようになりました。聖書は「あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。」と教えます。

今日から、良い言葉を、良い行動を、勇気を持ってまず自分から起こす人に、なりたいと思いませんか

Failure is the inevitable companion of a large vision.

今までも良く似た言葉を聞いたことがおありでしょう。「失敗は成功のもと」とか、「失敗は発明の母である」とか、他にもいろいろな人がいろいろな表現で、同じような内容の励ましを与えてくれます。

グラハム氏は聖書のメッセンジャーですが、聖書の中には、神が人を励ますために、365回も「恐れるな」と語りかけておられます。毎日1カ所ずつ読んでも、1年中励まされ続けます。そんなにあるのだから、「恐れるな」とは聖書の中心メッセージの一つだと思います。敵を恐れるな、人を恐れるな、目の前の困難を、自分の無力さを、過去の失敗を、これからの失敗の可能性を、「恐れるな」。

失敗を恐れることもないし、恥じることもありません。失敗から学ぶことが多いのです。グラハム氏は失敗をcompanion、友人、相棒、仕事仲間と呼んでいます。W杯での日本の活躍は見事でしたが、今から振り返れば、4年前の3戦全敗、今年のテストマッチ4連敗が活かされた上での大健闘だったと言えます。失敗が敵ではなくて友なのだ、と領けただけでも、ずいぶん励まされます。

しかし更に大切なのは、失敗が友人なのは、大きなビジョン、夢や展望を持っている時だということです。しばしば私たちが失敗を恐れるのは、また失敗を恐れて踏み出せないでいるのは、実は大きなビジョンというものを掴んでいない時なのではないでしょうか。大きな夢を持っていますか。大きなビジョンを、幻を描いていますか。何かに向かってチャレンジしていますか。そのためなら、失敗は犠牲的な友人となって、背中を踏み越えさせてくれるでしょう。

聖書は言います。「神は言われる。終りの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。するとあなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。」神は壮大なスケールのビジョンをお持ちです。その大きなビジョンの中で、あなたは造られ、生み出され、今私たちは生きているのです。その私たちに神は愛しておられます。ですから、もし本気で神を信じ、神の愛を受け入れ、神を心の中に迎え入れるなら、私たちは神の子どもとされて、本当の意味で神の大きなビジョンを共有することができるのです。

失敗を恐れず、大きなビジョンを持って神とともに生きる人になりませんか、神はグラハム氏を通して、今日も私たちに招いておられます。